

「三匹の怪物」のいずれかを仕留めていたのなら、一匹ごとに25点を数えてよい。他にも狩りの成果があったなら、それらも一つにつき1点を加えることができる。もちろん鬼えていたならばの點だ。

狩りは終わった。家に戻った俺は、一人で釜を傾けていた。生薑も心躍った時間だった.....もっとも、悪魔の力を借りたことが口惜しくないといえは嘩になるが。

14

いや、大それた欲は身の破壊を招くだろう。やめておこうがよい。俺は十分やったんじゃないか。本当に満足か？”

再び悪魔を呼び出して魔弾を.....

そんな考えが一瞬よまる。

「いや、大それた欲は身の破壊を招くだろう。やめておこうがよい。俺は十分やったんじゃないか。本当に満足か？”

再び悪魔を呼び出して魔弾を.....

そんな考えが一瞬よまる。

「いや、大それた欲は身の破壊を招くだろう。やめておこうがよい。俺は十分やったんじゃないか。本当に満足か？”

再び悪魔を呼び出して魔弾を.....

そんな考えが一瞬よまる。

間髪入れずに炎の虎を撃つならば 8へ
鳥を弾道に巻き込むことを狙うなら 3へ
山頂ではなく、湖の怪魚へ向けて打ち込むなら 5へ

13

巨木に登ってみる.....思った通り、ここからなら山頂と湖を一望することができた。炎虎と怪魚、どちらを狙うにもいい場所だ。

残る詳細不明の怪物とはどんな奴かと思案しながら山を観察していると、洞窟らしきものが見えた気がした。巨岩の反対側だ。

ここから獲物を撃つことにしたなら 10へ
洞窟を確かめに行くのなら 2へ
山腹の巨岩へ向かうなら 11へ

11

岩は山の中腹にあった。山頂と麓のちょうど中間だ。山頂を狙うにも、眼下の湖を狙うにも障害物はない。狙撃するには悪くない。しかし麓にそそり立つ巨木も、いい場所のように思える.....

ここから獲物を撃つことにしたなら 12へ
その場合、この後「仕留めた」という言葉があるパラグラフでは行き先指定を無視して、そのパラグラフ番号を÷2したパラグラフへ進んでもいい。

もっと良い場所を求めて山を下り、巨木へ行ってみるのなら 13へ
怪魚を狙うつもりなら、湖に近づくのも悪くないだろう。そうするなら 7へ

10

山の頂で虎があげる炎が見えた。視線を下へ移すと、湖の波間に怪魚の影が走っている。

炎虎を狙うのならば 3へ
怪魚を狙うのなら 5へ

7

暗い洞窟をそろそろと進む。ずいぶん進んだところで、何かが頭にあたった。これは岩根だ。岩つむりという軟体生物が地に身体を固定するための根で、珍味とされている。食通を名乗る連中なら、必ず大枚をはたく。

その極上の岩根を8本も切り取ることができた。しかし何という太さだ。さぞ巨大な岩つむりに違いない。

今後、「みごと」という文字列があるパラグラフでは行き先指定を無視して、そのパラグラフ番号から-2したパラグラフへ進むこともできる。

さあ洞窟を出よう。次はどこへ向かうか？

巨木へ戻るなら 13へ
湖へ向かうことにするのなら 7へ

1

「ひとたび放たれば、必ず獲物を捕らえる魔弾だ」

俺から狩りを奪ってしまえば、何も残りはしない。だからそれは現美となった。事故で利き脚が萎えてしまったのだ。俺は迷わず悪魔に縋った。最後にどうしても納得のいく狩りがしたかったのだ。

魔弾と引き換えに、悪魔は俺の指を一本切り取っていた。どうせ萎えて動かぬ指だ。惜しくはない。

その足で三匹の怪物が住むといわれる山へ向かう。頂に住む炎の虎、麓に広がる湖に潜む巨大な怪魚。残る一匹の詳細は不明だが、そのいずれかをしとめるだけでも、名を歴史に刻む偉業となるだろう。

弾は一発。撃てば必ず当たると悪魔は言っていた。引き金を引くぐらいいなら、残った腕でもできる。

さて、どこで銃をぶっ放すか決めなければならぬ。

山腹にある巨大な岩へ向かうのなら 11へ
ひときわ自立つ麓の巨木へ行くなら 13へ

魔弾の狩人 結核一巻

2

それは確かに洞窟だった。もしかししたら、ここに例の三匹目が潜んでいるのかもしれない。近づいて中をうかがってみるか.....獸のにおいも漂ってこない。

中を探るのなら 9へ
洞窟に入るのはやめて、湖を闊へてみるなら 7へ

8

必中の魔弾が天に向かって走る。鳥どもにもは目もくれず、弾は炎を上げる虎に吸い込まれた。断末魔の吠え声と共に炎が強くなり、虎が落ちてくる。みごとに仕留めたというわけだ！

炎の塊となった虎の死体に巻き込まれ、7羽の鳥が燃えながら落ちてきた。たった一発の弾丸にして、素晴らしい成果だ！

9

暗い洞窟をそろそろと進む。ずいぶん進んだところで、何かが頭にあたった。これは岩根だ。岩つむりという軟体生物が地に身体を固定するための根で、珍味とされている。食通を名乗る連中なら、必ず大枚をはたく。

その極上の岩根を8本も切り取ることができた。しかし何という太さだ。さぞ巨大な岩つむりに違いない。

今後、「みごと」という文字列があるパラグラフでは行き先指定を無視して、そのパラグラフ番号から-2したパラグラフへ進むこともできる。

さあ洞窟を出よう。次はどこへ向かうか？

巨木へ戻るなら 13へ
湖へ向かうことにするのなら 7へ

3

どうせなら、より多くの成果を狙いたい。鳥と炎の虎が一緒に並ぶ瞬間を逃すまいと集中する.....何時間立ったら逃げよう？ いや、たった数秒だったかもしれない。その瞬間を逃さず、引き金をかけた指に力を入れる。

狙い通り、放たれた魔弾は鳥を3羽も撃ち抜き、そのまま虎へと命中した。虎は死に顔して炎を激しく噴き上げ、身をよじりながら麓へと落ちていく。たった一発の弾丸にして、素晴らしい成果だ！

14へ

14

4

炎の塊が湖に落ちると、あっというまに辺り一面が熱い霧に包まれた。よくは見えませんが、湖が蒸立っているらしくコロコロと音が響いてくる。その中、かすかに泣くような声か聞こえてきた.....

やがて霧が晴れたので湖へと向かう。驚いたことに水は全く蒸発しきっておおり、干上がった湖の底で10匹の子羊と共に巨大な怪魚が潜りて息絶えていた。全て、たった一発の魔弾が成したのだった。

14へ

5

放った魔弾は一直線に湖へと吸い込まれる。一瞬の後、櫓を負った怪魚が苦し気に大きく跳ね上がり、水面を揺らがす。獲物が水の下へ消えると、あっという間に湖が赤く染まった。

だが奴の身体は水底に沈んでしまった。確かに魔弾は怪単の身体に食い込んだ。だが、果たして奴は息絶えたのだろうか.....？ もしまくいついていたとしても、残念ながらあの巨体を引き上げることができそうにない。

14へ

6

燃える虎の体が落ちてくる！
慌てて岩から飛び降りたその背後で、轟音とともに岩が燃え上がった。同時に魂を引き裂くかのような声が響き渡り、岩が大きく震えて身じろく。この岩の下に、巨大な岩つむりが潜んでいたのだ。とてつもない大きさだ.....こいつが三匹目の怪物に違いない！

業火に包まれ、焼け焦げゆく大岩の姿はゆっくりと歪みごとりと虎の死体諸共に山腹を転がり落ちていった。

14へ

7

湖は波立っている。怪魚が水面近くを泳いでいるのだ。あまりにも荒々しいので、丸々と太ったウナギが陸へと打ち上げられている。もちろん怪魚よりは小さいが、それでもなかなかの大きさだ。全部で8匹。こいつはいい。

それはともかく、そろそろ本命を狙わなければならない。ここからでも山頂を見上げることができるが.....

山頂の炎虎を狙うのならば 3へ
波間に見える怪魚の影を狙うのならば 5へ

14へ